

(1) テニスコート、プール、サッカー場などの会員制のクラブ。

現在地—横浜市中区矢口台—

YCAC = Yokohama Country & Athletic Club.

(2) Grauert, Hermann Ludwig 一
八三七年オランダ生れ。安政四年

(一八五七年) 来日。翌年、横浜に来て貿易業グラウエルト商會を設立、国際文化交流に尽力。一九〇一年十一月一日、横浜で逝去。

(3) Transient (短期滞在者)
(4) ロータリークラブ(国際親善と社会奉仕をモットーとする実業家・知

識人の国際的社交団体—一九五〇年、米国シカゴ市で Rotary International が創設された) の会員、アポロ石油社長加藤進治氏

参考
昭和五十九年八月、横浜の経済人で組織する「横浜海上空港研究

會」(代表、加藤進治・横浜商工會議所企画特別委員会副委員長) が、横浜市の金沢沖一五〇〇ヘクタールを埋め立てて本牧と結ぶ「国際空港建設構想」を発表。

② ホームステイ活動 我が家の国際交流

佐藤敦子

一—はじめに

友人は私を国際人という。

海外に一度も行ったこともなく、英会話も中学生程度で、不勉強でたいして進歩もしていないのに、我が家にはここ六年間、毎年外国人が家族として一緒に住んでいる。

アメリカに四人、オーストラリアに一人、香港に一人、中国に二人、フィリピンに一人、私を「お母さん」と呼んでくれる息子や娘がいる。台湾、タイ、ビルマ、マレーシア、ブルネイ…の娘の友達も新たに加わって、国際色豊かである。

平均的日本人として暮らしていた我が家が、賑やかな国際家族(?) となった

のは、娘のアメリカ留学をきっかけとしてであった。それも偶然的チャンスで。

娘が中学生になった頃、この子には国際人になって欲しいと願った。

まず英語が話せるようにしたい—そのためには外人と話す機会を持てばよい。そこまで考えたものの、さてその後どうしたらいいか分からない。

一—はじめに

二—YFUとは

三—娘の留学

四—受け入れの問題点

五—我が家のホームステイ活動

六—おわりに

知人が英語の先生としてテレビに出ていたの思い出し、電話を試してみた。

「外人の子供と遊ばせれば良いだろうが、日本にいる外人には限りがある、そんな機会をつかむのは難しい。」と言いつれない答え。

それから四年後、街で偶然大学時代の後輩に出会った。久しぶりで積もる話を

するうちに、彼の高校生のお嬢さんが今アメリカ留学していると言う。YFUといたった組織の名前をその時はじめて知った。次年度のYFU生募集の締め切り一週間前であった。

反対する父親を説得して、娘は書類を取り寄せ、試験を受け、運良くパスした。そして娘の留学中、私はYFUの学生をお世話をする側の地区委員となった。

これが私の国際交流にのめり込むきっかけになったのである。

二——YFUとは

YFU (Youth for Understanding)

は、米国非営利法人として、アメリカ国務省より公認されている同種の高校生交換留学プログラム二団体のうちでは、参加者数において世界最大の組織である。

YFUは、現在参加国が三一カ国、参加学生数は年間八千名以上、延べ十万人を超えた。

日本では二十八年間に約八千名の日米高校生が相互に交換留学している。

YFUは単なる語学研修のプログラムではない。外国の家庭に一年間家族の一員として入り、異文化体験を通して、

・視野を広め、・自己を見つめ、・他を知り、・国際的友情の輪を広げ、・ひいては世界平和に寄与しようという家族ぐ

るみの運動である。

YFUプログラムの基本になっているのは、十五歳から十八歳までの高校生を対象とした「ホーム・ステイ」である。

学生達は現地の高校に通学しながら、「母国と異なった社会の日常生活」で、「母国とは異なった学習パターンにうまくついていく」こと、「母国とは異なった地域社会で同年輩の仲間たちと友達になる」ことを学ぶのである。

日本からアメリカへ留学する学生を例にとるならば、彼らは聴講生としてではなく、正規の学生として編入されるので、始めからアメリカの高校生同様の扱いを受ける。授業料は免除されるが、実験・材料費は必要である。

YFUはボランティアによって支えられており、学生が滞在する家庭は無料奉仕である。

なお、次のような奨学金プロジェクトもYFUの協力のもとに行われている。

・上院交流

日米特別交流計画の一環として、米国上院議員百名全員が、州代表の形で一州あたり二名推選、全米で百名の高校生が毎年夏一カ月間、日本でホームステイをする。(日本政府の資金援助)

・府県交流

「米国政府高校生招致計画」として文部省、各都道府県教育委員及びYFU

が選考に当たり、各県の高校生四七名が一年間米国で生活体験をする。(米国政府の資金援助)

・法人スカラシップ

多数の会社より毎年継続的にスカラシップを受けて、米国高校生が日本へ、日本高校生が米国へいっている。

・その他

横浜在住の高校生のみを対象にして、「YFU横浜サンデューゴ姉妹都市奨学生計画」がある。今年は二人に支給されることになっている。

三——娘の留学

長女は、県立湘南高校の二年生の夏に渡米した。「風と共に去りぬ」でおなじみのジョージア州のアトランタに近いクレイトン市のフェッツアーさんのお宅に一年間ホームステイしながら、地元の高校に通った。息子一人、娘二人の民間航空のパイロットの家庭で、両親は大変かわいがって下さった。

ヨーロッパから来たYFUの留學生に比べて、会話も下手で落ち込み自信を無くした時もあったらしい。しかし、幼時から習っていたピアノが救いとなった。「芸は身を助く」である。

アメリカの高校では学生は色々な活躍の場がある。その一つが、ジョージア州

文化活動コンテスト。スピーチ、ピアノ、歌、スペリング、朗読、それぞれの分野で選ばれて、芸を競う。娘は、そこでピアノを弾き第一位となり、学校の代表となった。

日本はピアノの普及率が世界一とか。しかし、クレイトンの家庭でピアノがある家は少なく、ピアノが弾ける人があまり多くないという事情も幸いしたようである。ともかく第一位となり、さらに市の大会に出て運よくまた第一位となり、次に州の大会に出て二位となった。そうなる学校や、町の人からも認められ、ようやく言葉のハンディを乗り越えて自信を取り戻した。

教会で合唱団の伴奏を引き受けたり、ホストブラザーの結婚式にピアノを弾かせて貰ったのも楽しい思い出となった。大の仲良しは、同じくYFUフィレンツェのお嬢さん、金髪のリッタであった。言葉のハンディが二人を結びつけるきっかけになったようである。

一年間の生活はあっという間に過ぎ、帰国した。帰国直後は日本語がうまく出来なかった。

留学したと言うと、英語が得意とみられがちである。実際は多少英会話が上達したということであって、受験に有利とは一概には言えない。

長女の場合は、英語が出来なければ恥

しいという気持から、帰国してから英語の勉強に力を入れた。高三で英検二級、大学三年で一級を取った。

大学は慶応大学法律学科を選び、現在四年生である。

その後の娘の動きを見てみると、着実に国際人に育っているように思う。

YFUの帰国生としてのボランティア活動の他に慶応に留学している世界各国の学生の世話に明け暮れている。また、一昨年は三千人の青年交流に大学の代表の一人として中国に招かれた。昨春秋には総務庁の主催する「東南アジア青年の船」の日本代表の一員として参加した。

アセアン六カ国と日本の青年それぞれ三五名ずつ計二四五人が日本丸(帆船の方ではない)で生活を共にしながら、各国を歴訪し、ホームステイも体験し、お互いを理解しあうのである。

これらに参加するについては、親の同意を求められたにしても、調査や手続きはすべて本人がやった。資金は自分のアルバイトで賄った。

娘には一体何人の外国人の友達がいるのであろうか。多分本人にもすぐ正確な数が出てこないであろう。その何人かがあるの友達でもある。

最近、彼女はタイについて興味を持ち、資料を読み始めたが、分からない事はタイ人の友がよいアドヴァイスをして

くれる。

将来外国人に日本語を教える教師になりたいという希望を持っている。

留学をしなかったらこのような方向に進まなかったことは確かである。

YFUの帰国生一般に言える事であるが、留学を終えて一年後帰国すると、実に積極的になる。そして独立心が旺盛になる。親離れ子離れが出来るということであろうか。

また、異文化に接し、かえっていかに自分の国のことを知らなかったかに気付き、改めて日本のことを勉強を始める学生が多い。

娘に続いて長男がアメリカで一年間のホームステイ生活を送っている。両親とも、障害児教育に携わっている心理学者で子供はいない。お父さんからフルートとワインの味わい方を教わった由。

彼はジムやデイビットと同室で暮らして、たどたどしい会話を身に付けて、得意なもの絵画だけという心細い状態で渡米した。どのように成長してくるか、七月の帰国が待たれる。

娘の時は猛反対だった夫も、息子の時はすんなりと許可した。おまけに末の息子もこの夏、渡米する。お陰で我が家の家計は火の車。毎年受け入れの息子や娘が増えるのであるから、もう大変というわけで、私は「国際肝つ玉かあさん」

にならざるを得ないのである。

四——受け入れの問題点

初めて留学生を受け入れる家庭の主婦にとつて、最大の悩みは食事である。

しかし案ずることはない。帰国生の話を聞くと、アメリカ人の食事は一般に質素だという。日本人の普段の食事は豪華(?)の由。

経験豊かなホストマザーに聞くと、おでんの薩摩揚げ・昆布、あるいはきんぴら、おにぎり等、純日本風好みの子。うなぎが好きで、お土産にパック入りを買って帰った子。肉が食べられない子、と様々な学生がいる。これはいづれこの国も同じであろう。

以上のように、学生には、個人差があるが、総じて言えば、中国風、洋風の物ならたいてい食べる。フライ・餃子・焼きそば・カレーライス・スパゲッティ等はお勧めメニュー。ジュース、コーラの類いは大好き、マクドナルド大歓迎といったところであろうか。スーパの食品売り場に一緒に連れていって、本人から好みを聞くのが一番分かりやすい。

・部屋

同性であれば子供と同室でも良い。(個室の方を望む学生もいるが)我が家では二段ベッドで過ごさせた。

・寝具

日本の布団を珍しがる。しかし、背の高い子が来ると大変、座布団を継ぎ足して、何とか急場をしのぐ。

のっぽのジムが来たときはベッドから足がはみ出し、いつも鴨居に頭をぶつけていましたっけ。

・トイレ

建前としては、日本式くみ取りのトイレ可としている。

しかし、二、三日のホームステイならよいが、一〇日も過ぎるとストレスがたまってくる。背の高い子、体重の重い子程苦痛がひどく感ずるようになる。

県下の田舎に行った男の子(一七歳)もこの問題で我慢し切れずホストチェンジした。地区委員宅に来て、洋式トイレを見たとき、「ウエスタントイレノワオー」と、飛び上がって喜んだという。



夏の二カ月間の短期留学の学生は、留学といっても、休暇を過ごしに来ているという意識が強いので、全員日本語を熱心に学んだり、日本文化を勉強しようとするわけではない。

「朝、長時間シャワーを使い、洗面所を占領されて、お父さんが会社に遅れそうになった」

ほとんどの学生は朝シャワーを浴びる習慣がある。事前に割り当て時間についてよく話し合っておくことが必要である。

こんな細かな事が大切で、YFUではこの他起こりうる問題について、学生・ホストファミリー双方にアドヴァイスして、トラブルを事前に防ぐようにしている。

YFUの場合一年間のプログラムでくる学生は、日本の高校に通わなければならない。

この受け入れの学校探しは、ホストファミリーを捜すこと以上に、YFU事務所と地区委員の悩みの種である。

夏の期間の僅か一日だけの登校も許さぬ学校がある。理由はいろいろあるであろうが、せつかく日本を選んで異文化体験を求めてやってきた外国の学生に、是非広く門を開いてほしい。せめて横浜の学校だけでも。

同年齢の外国の学生を受け入れて、直接ぶつかり合い話し合ってこそ、国際交

流の芽が育って行くのでなからうか。

一年間（正確には十カ月間）の受け入れについて理解を示す学校が増えてはきているが、日本からの留学生の方が、アメリカへもオーストラリアへも輸出超過となっている（表一）。

表一 YFU留学生の派遣・受け入れ状況 (86年度)

1年間	日本→米国 日本→豪州 日本→フィリピン 日本→小計	622人 54人 1人 677人
短期	日本→豪州 日本→韓国 日本→小計	8人 10人 18人
1年間	豪州→日本 フィリピン→日本 小計	26人 1人 27人
短期	米国→日本	430人

(予定を含む)

YFUでは夏になると留学生のためにいろいろな行事を計画する。横浜で一番人気が高いのは小学校訪問である。

昭和五十八年は日野南小学校、五十九・六十年と続けて港南台第一小学校にそれぞれ四〇名近い留学生を連れていき「熱烈歓迎」を受けた。その他ホストファミリーの近くの小学校に小人数で訪問した時も同様である。

小学生は言葉が通じなくても、人懐っこく異人さんに寄っていく。一クラス二名ずつに別れて給食や遊び

を共にするのであるが、私達ボランティアの立場で見ていると気持ちが良いのは、子供達は相手の肌の色は問わないことである。黒人もアジア系の学生も皆同じように扱ってくれる。彼らは一日スター扱いされ、サインをせがまれる。中には金髪を一本記念に失敬する子も出てくる。子供達も、学生もおおはしやぎ、いつも大成功に終わるのである。

この小学校のようなあけっぴろげの暖かい心が高等学校にはほしいなあと願っている。

二十一世紀は近い。
日本の学生に交じって色々の国からの学生が楽しく勉強出来る雰囲気造りが学校教育に求められるのではなからうか。

五——我が家のホームステイ活動

YFUでは、参加家庭がアメリカ（あるいはオーストラリア）の留学生のホストファミリーになることを勧めている。

受け入れは絶対条件ではない。ボランティア精神を十分理解し、留学生を暖かく迎え入れることは、学生や家族にとって留学する時の逆の立場から理解できるのである。

外国人留学生のホームステイについては、夫は始め猛反対。色々理由があるが一番の問題は、疲れて帰ってきた時、リ

ラックス出来ない。

夏の暑い盛りは、ランニングシャツにステテコスタイルでビールを飲むのが常、それが年頃のお嬢さんがいるとなれば……

娘だつてアメリカの見知らぬ方のお世話になるのだから、こちらも預からなければ……の意見が勝った。

かくして一九八〇年七月、我が家に迎える初めての外人として、サンフランシスコからジャネットがやって来た。

彼女は日本人の両親を持つ日系二世である。二世といつても週に一度日本語学校に通っているだけなので、日常語は英語であった。分からない言葉はお互い辞書が頼り。二カ月間のホームステイの終わりには殆ど日本語で用は足りたが。

全く見ず知らずの他人を我が家に迎え入れるという経験は初めてのことであった。緊張したのは一週間ぐらいであつたらうか。

若いと言うことはいいことである。相手の胸の中にすぐ飛び込んでいける。

昭和一斤の外人コンプレックスの固まりの夫にとつて（失礼）、多少なりとも日本語の分かる外人を初めに迎えた事が良かった。彼女の口からアメリカ人の生活

についていろいろと聞くうちに娘の留学について反対していた気持ちを和らげる事となつた。

その後毎年我が家には色々な国の人がホームステイしている。髪の毛・目の色は様々であるが、若者は若者、しばらく付き合えば日本人の子と同じ。

朝起きて来た時など、うっかり日本語で話かけて、「What?」と聞き返されて、「あ、ごめん」と言う事もしばしば。???

特別扱いにしないで、家族と同じ気持ちで接すれば、以心伝心、相手もリラックスしてくれる。総てがうまくいくとは限らないが、暖かい気持ちで付き合えば何とかうまくやっていけるものである。

育った環境や価値観が違うので、時々意見の衝突もある。私の場合一番悩んだのは異性問題であった。

一昨年の夏二カ月間、我が家に滞在したのはロスから来た都会っ子のジム。彼は息子の高校へ一日行つてすぐ、好きな女の子を見付けた。

デートしたいが、いかと聞く。

日本の高校が保守的なこと、日本の女の子はデートに慣れていないからすぐ夢中になってしまう。だからあなたが帰国したら彼女は勉強が手につかないで成績が下ってしまう。だから……と心配症の日本のお母さんはしどろもどろで説得にとめた。

しかし、今まで自分の意志でガールフレンドと自由に交際してきたジム君、納

得する筈がない。隠れてデートしていたようである。帰国してからこのことがわかりがっくり。

その彼も今ではアメリカ滞在中の息子の良き相談相手で、よく電話をしてくれるときか。

昨年三月末から今年の一月までオーストラリアのメルボルンからデイビッドがやってきた。市立南高校の一年に入れていただいて、先生方の熱心な指導のおかげで日本語が上手になって帰国した。

金髪で青い瞳をした彼は女の子の憧れの的。ジム君にこりた私はデイビッドには事前に虫よけをいろいろやった。よくお母さんの言うことを聞いて、女の子に平等につきあってくれた。

「お母さん、今日とつてもすてきな子を見つけたよ。あの子とつきあいたいなあ。」

「だめ、あなたは全校の女の子にとってスターなんだから、もし一人の子とだけ付き合おうと、きつとその子はしつとされて困るようになる。デートはオーストラリアへ帰ってからにしないさい」

自分の国のデートのしかた、オーストラリアのママの考え方、将来の計画、いつもいろいろな事を話してくれた。時には夜更けまで。

その彼ももういない。食料品売り場で彼の好きな食べ物を見ると悲しくなる。

現在アメリカのダートマス大学の学生ランデイが二月から来ている。デイビッドのいない淋しさは彼女によって救われた。このところ外国からの手紙が毎日配達される。我が家の国際交流は、手紙の面からもたいへん盛んである。とは言っても私あてというわけではなく、何と言

っても最近の受け取り人の王者はランデイ。もっぱらアメリカの彼女の家族やボーイフレンドである。慶応大学の日本語学科に留学中。

昨年の八月から来日、始めは東京で下宿生活をしていしたが淋しくてホームステイを希望したのである。三月に両親がやってきたが彼女の様子をみて安心して帰国した。

昨年はY O K Eのご紹介でフィリピンのパントマイ劇団の方を、Y F Uの仲間と共にホストした。私の家にはダンテが来た。芸達者な教養溢れる紳士であった。

さて、今年の二月フィリピンの選挙、そして政変、目まぐるしく変わる日々の情報。テレビの報道に釘付けになった。もしや、彼等の身に何か起こらないかと、ホストファミリーは本当に心配した。

無事の知らせにどんなに喜んだことか。フィリピンが平和で豊かな国になるようダンテ夫妻のためにも心から願って

いる。

六——おわりに

Y F Uでは高校生の他に、文部省の招きで来日の中国人日本語教師のホームステイのお世話をしている。

我が家にも今まで二人の先生がそれぞれ一泊した。なんと言っても一番嬉しいのは日本語が通じることである。

彼等の語学力には驚嘆する。日本の古典まで勉強しているとのことである。何万人の中から選ばれていることを考えれば、当然なのかも知れないが。

いろいろ話して行くうちに（決して政治問題は話さない事にしている）現在の日本がいかに恵まれた国であることが分かってきた。政治的にも経済的にも。

アジアの人と付き合せて感じることは、我々日本人が失いつつある礼儀正しさ、遠慮深い慎みを持っていることである。

私の家族も、Y U Fの仲間達（横浜に多くいます）も、外国人を家に泊めるというささやかな交流を通して、ホームステイは与えるばかりでなく、得るものが多いということがだんだん分かってきた。何といつても大きな喜びは、相手の国が身近なものになったことだろう。私にとって、アメリカはジャネット、

ジム、ミッシェル、そして現在ホームステイの中のランディの国であり、オーストラリアはデイビッドの国である。香港はジョセフ・イヌ、そしてフィリピンはダンテの国。

毎年、子供達のホームステイ先も含めて、世界中に親戚が増えていく。彼らは

私の家族にとって心の財産である。

さて私がこれからやってみたくと思うことは、横浜に住んでいるアジアからの留学生によいホストファミリーを紹介することである。

我々とはかく英語圏の人だけに目を向けがちであるが、今一番親しくすべき

なのはアジアの国々から来た人である。

多くの学生が寮や下宿に住み日本人との交流が少なく聞くと、志を立てて日本にきた若者達を家庭に暖かく迎えてあげたらどんなに喜ぶだろうか。

横浜こそこんな国際交流にふさわしい

街である。

あなたもホストファミリーになってみませんか。

楽しいですよ！
本当ですよ。

△主婦▽

③ 横浜J.C.の国際交流活動

宝田良一

一 はじめに

昭和二十六年に創立以来、横浜青年会議所（横浜J.C.）は横浜の明るい豊かな街づくりにボランティア活動を注いできた。戦災敗戦に引続く市中枢部の接收、この中であつて街の復興に向かつて横浜J.C.は産声を上げた。以来、横浜市の発

展に様々な功績を残してきていると思ふ。

J.C.の目標は「社会と人間の開発」である、日本の独立と民主主義を守り、自由経済体制の確立によつて豊かな社会を創りだすため、「品格ある青年」が市民運動の先頭にたつて進む団体、それが青年会議所です。個人の修練、社会への奉

仕、世界との友情がJ.C.の三信条で、我々のJ.C.運動の基盤になつている。これらのことが横浜J.C.の活動の基本であり、国際交流活動も、J.C.の目的を果たすための手段の一つであります。

一人の市民として、幸せな生活を望むとき、その社会環境を作り出すために奉仕をする。J.C.は一市民であるのと同時

に、夫（妻）の立場での役割、さらに父親（母親）の立場での役割も果たさなければならぬ。

戦後四一年の歳月が流れ、時代の潮流は、国内問題と国際問題との区別をもちや許さなくなつた。政治的側面や経済的側面にとどまらず、私たち日本人、そして横浜に生活し働く私たち一人ひとりに

一 はじめに

二 国際交流活動

三 二十一世紀の国際時代を展望して